

教わったこと

中 三

私の学校には特別支援学級がありません。給食を一緒に食べたり、ときには行事をつくりあげたりする仲間として、私たちは日々共に生活しています。私が通っていた小学校には、そのようなクラスはなかったので、入学した頃、「行事や給食に特別支援学級の八組さんが加わりません。」と言われても別に気にも留めませんでした。しかし、八組の仲間はたくさん行事を通して、私たちに大切なことを教えてくれました。

去年の体育祭練習での話です。私のクラスには八組の仲間が二人加わり、四十一人の生徒で毎日大縄の練習をしていました。そんなある日、練習が終わって教室に戻るとき、怪我のため練習を見学していた友達が私に言ってきました。

「八組のあの子。足が全然上がっていないから縄がすれすれだよ。」

その頃は回数を増やすのに必死だったので、あまり足が上がっていないその子のことを、

「ちゃんとやってほしいよね。」

と言う人たちが出てきていました。私も友達から、足を引く張るその子の様子を聞いて、みんなと同じような気持ちでした。当然、気持ちが一つになっっていないこのクラスはなかなか回数が伸びずに、「なんでうちのクラスは八組が二人も加わっていないのだろう。加わってないクラスはいいよね。」など言い始める人が出てきました。私もいい加減、この大縄の練習に飽きてきたある日の放課後、まだ教室に残っていた私の耳に、担任の先生の声が聞こえてきました。

「今、八組さんの教室に行ってきたけれど、Aさん、ちゃんと八十回ジャンプしていたよ。」

私はとても驚きました。八組のその子は、私たちが練習を終えて帰ろうとしているときも、私たちに迷惑をかけないように、ひそかに努力をしてみました。私はこのとき、今までとんでもない思い違いをしていたことに気付き、すぐく申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。自分たちよりも一生懸命に取り組んでいるのに、うまくいかないことを人のせいにしていたと思うと、自分たちがどれほど小さく情けなかったのかを思い知らされ

た感じでした。

日に日にひっかかる回数が減っていくAさんは、クラスの一員として溶け込んでいきましました。Aさんの努力はクラスに広まり、前のような言葉はもう聞かれなくなりました。私たちはクラスで成長することができ、リハーサルでは五十回を越える記録を出すことができました。

私は、差別や偏見の目がクラスから消えたからこそ、「五十一回」という記録をつくることができたいと思います。Aさんの努力は大きな力をもっていました。そして、練習をすれば必ずできるということを、この大縄で教えてくれました。

八組の生徒は普段、私たちと全て同じ内容の授業やテストを受けているわけではありません。特別支援学級だからといって、差別や偏見の目を向けるのは間違っていると思います。誰にでも、その人にしかできないことがあります。いつか差別や偏見などの考えがなくなる世の中を創っていきたいです。